

*Prajñāpradīpa*と*Madhyāntavibhāga-bhāṣya* における勝義解釈

早 島 慧

はじめに

1. *Prajñāpradīpa*と*Madhyāntavibhāga-bhāṣya*との勝義解釈の共通点
2. 四種清浄法と*Madhyāntavibhāga-bhāṣya*における勝義解釈
3. *Prajñāpradīpa*と*Madhyāntavibhāga-bhāṣya*との勝義解釈の相違点

おわりに

はじめに

中観学派の始祖龍樹 (Nāgārjuna, ca. 150-250)^①が『根本中論頌 (*Mūlamadhyamaka-kārikā*: MMK)』第XXIV章「観四諦品」において彼の思想の根幹を担う二諦を説くことはよく知られている。この二諦のうち勝義 (paramārtha) について、清弁 (Bhāviveka, ca. 500-570)^②によるMMKの註釈書、『般若灯論 (*Prajñāpradīpa*: PPr)』の解釈が、中観学派の論敵と見なされる瑜伽行唯識学派の論書、『中辺分別論 (*Madhyāntavibhāga* [-bhāṣya]: MAV [Bh])』の勝義解釈の影響下にあることは諸研究者によって指摘されている。PPrは勝義解釈に際して三種の複合語解釈を行うが、これは同様の複合語解釈を行なうMAVBhの勝義解釈の影響であると考えられるのである。

しかし、筆者はPPrとMAVBhとの勝義についての複合語解釈の一致は副次的な影響によるものであり、勝義を分類する^③という特徴こそがMAVBhからPPrへの直接的影響であると考えている。つまり、MAVBhは四種清浄法に基づき円成実性を四様に分類し、この分類された円成実性によって勝義、世俗という二諦を示すのであり、PPrはこのMAVBhの分類する^④という特徴の影響を受けて、それ以前のMMKの註釈文献には見られなかった勝義の分類を行うのである^⑤。

本稿は、PPrとMAVBhの勝義解釈をそれぞれ整理し、両者の関連を再考することを主題とする。

1. *Prajñāpradīpa* と *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* との勝義解釈の共通点

PPrはMMK-XXIV k.8に対する註釈として、勝義を以下の如く解釈する。^⑤

don dam pa ni

[1] de don kyang yin la / dam pa yang yin pas don dam pa'am /

[2] rnam par mi rtog pa'i ye shes dam pa'i don yin pas / don dam pa ste / de kho na gzhan las shes pa ma yin pa la sogs pa'i mtshan nyid do // don dam pa nyid bden pa yin pas / don dam pa'i bden pa ste / de dus thams cad dang rnam pa thams cad du de bzhin du gnas pa'i phyir ro //

[3] rnam par mi rtog pa'i ye shes de'i yul can yang yul med pa'i tshul gyis don dam pa ste / de la don dam pa yod pa'i phyir ro //

[4] [4-1] de 'gog pa dang rjes su mthun pa skye ba med pa la sogs pa bstan pa dang / [4-2] thos pa dang / bsams pa dang / bsgoms pa las byung ba'i shes rab kyang don dam pa ste / don dam pa rtogs pa'i thabs kyi phyir phyin ci ma log pa'i phyir ro //

勝義 (*paramārtha)、

[1] それは対象 (義、*artha) でもあり、勝れたもの (勝、*parama) でもあるので「勝義」である。

[2] また、勝れた (勝、*parama) 無分別智 (*nirvikalpajñāna) の対象 (義、*artha) であるので「勝義」であり、[勝義である] 真実 (*tattva) は「他から知られず」^⑥等の特徴とするものである。勝義がまさに真理 (諦、*satya) であるので、勝義諦 (*paramārtha-satya) である。それ (勝義諦) はいかなる時も、いかなる形でも、そのようにある故に。

[3] それ (勝義) を対象 (*viṣaya) とする無分別智もまた、対象が存在しないというあり方によって、「勝義」である。そこ (無分別智) に、勝義が存在する故に。

[4] [4-1] それ (対象として把握されるような勝義^⑦) の否定に適合する「不生」等の教説と、[4-2] 聞・思・修から生じる智慧もまた「勝義」である。勝義を理解する手段 (*upāya) であるので、無顛倒である故に。

PPrは勝義を [1] 勝れた対象である真実、[2] 無分別智の対象である真実、[3] 無分別智、[4] [4-1] 「不生」等の教説、[4-2] 聞・思・修から生じる智慧の四種であるとし、このうちの三種の勝義に対して、三種の複合語解釈を行う。PPrは勝義を [1] 「勝れた対象」という

Karmadhāraya (Kdh) 解釈、[2]「勝れた智慧の対象」という Tatpurṣa (Tp) 解釈、[3]「勝義を有するもの」という Bahuvrīhi (Bv) 解釈によって複合語を解釈する。そして、PPr と同様に三種の複合語解釈を用いる勝義解釈が、MAVBh にも見られる^⑨。

paramārtham tu ekataḥ // MAV-III k.10d

paramārthasatyaṃ / ekasmāt pariniṣpannād eva svabhāvād veditavyaṃ / sa punaḥ
kathaṃ paramārthaḥ /

[I] artha- [II] prāpti- [III] prapattyā hi paramārthas tridhā mataḥ / k.11ab

[I] arthaparamārthas tathatā paramasya jñānasyārtha iti kṛtvā /

[II] prāptiparamārtho nirvāṇaṃ paramo 'rtha iti kṛtvā,

[III] pratipattiparamārtho mārgaḥ paramo 'syārtha iti kṛtvā /

一方、勝義は一つによって〔知られるべきである〕。MAV-III k.10d

勝義諦は円成実性、ただ一つによって知られるべきである。では、それはどのように勝義であるのか。

実に、[I] 対象と [II] 体得と [III] 行為として、勝義は三種であると考えられる。

k.11ab

[I] 対象としての勝義は真如である。勝れた〔出世間〕智の対象という意味で。(Tp 解釈)

[II] 体得としての勝義は涅槃である。勝れた目的という意味で。(Kdh 解釈)

[III] 行為としての勝義は道である。それは勝れた義（目的、対象）を有するという意味で。(Bv 解釈)

MAVBh は円成実性によってのみ勝義は知られるとし、勝義を真如、涅槃、道の三種であると説く。そして、この三種の勝義は順次、[I]「勝れた出世間智の対象」という Tp 解釈、[II]「勝れた目的」という Kdh 解釈、[III]「勝義を有するもの」という Bv 解釈によって導きだされる。

先の PPr の複合語解釈とこの MAVBh の複合語解釈の一致から、斎藤 [1999] は MAVBh の勝義解釈が「パーヴィヴェーカの勝義解釈に少なからぬ影響を与えたと考えられる」と指摘する^⑩。PPr の勝義解釈のルーツを MAVBh の勝義解釈とする、斎藤の指摘は現在学会の通説となっていると言っても差し支えないと思うが、PPr の勝義解釈の詳細については諸研究者によって批判的見解が加えられている。斎藤は筆者の勝義解釈の分類で言う [3] 無分別智と [4] [4-1]「不生」等の教説、[4-2] 聞・思・修から生じる智慧との両方が Bv 解釈によって導きださ

れるとし、[3] と [4] を区別せず PPr の勝義解釈を三種と理解している。

一方、[3]、[4] を区別しない斎藤に対して、池田 [2001] は PPr の勝義解釈について、「筆者はここに①②③④^⑩の勝義解釈が説かれ、④のみレベルが異なり、④は①②③に随順すると理解している。しかし、従来③④は《bāhuvrīhi の解釈》として同一視され区別されない」と斎藤とは異なる見解を示している。池田は [3] と [4] はともに Bv 解釈により導きだされるが、「無分別智」のレベルである [3] と [4] 「説示と教説」は同列に扱われるべきではなく、レベルの相違から二つが区別されるべきであり、PPr の勝義解釈は四種であるとする^⑪。

また Kumagai [2011] は、[4] は勝義理解の方便と見なされており、[3] 主体たる勝義 (absolute truth as subject) と [4] 方便たる勝義 (absolute truth as a means) として区別されると指摘している^⑫。さらに、熊谷は斎藤、池田とは異なり、[4] には勝義の複合語解釈は用いられておらず、Bv 解釈が用いられるのは [3] 無分別智のみであるとしている。

このように PPr の勝義解釈の詳細については複数の見解が示されている。さて、筆者は PPr の勝義解釈は四種であると捉えており、[4] については熊谷と同様に複合語解釈は用いられていないと考えている。勝義を三種の複合語解釈を用いて解釈する点は、それ以前の MMK の註釈書には見られない PPr の勝義解釈の特徴の一つであるが、勝義をレベルの相違によって分類する点もまた大きな特徴と言える。先行研究において MAVBh と PPr との勝義解釈の関連はその複合語解釈に重点が置かれてきたが、PPr の勝義を分類するという特徴もまた MAVBh の影響であり、むしろこちらの方が直接的影響であろうと筆者は考えている。MAVBh は瑜伽行唯識学派の根本真実である三性によって二諦を説明するのであり、複合語解釈はあくまでもその説明の副次的なものにすぎない。両文献における勝義解釈の関連を考察する上で注目すべきは、MAVBh において二諦が三性によって示されている点であり、この三性、特に円成実性と PPr の勝義解釈との関連が注目されるべきである。

2. 四種清浄法と *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* における勝義解釈

MAVBh は円成実性を四様に区別し、その四様の円成実性を二諦へと配当すると考えられる。先に引用した MAVBh の一節が「勝義は円成実性一つによって知られるべきである」と説いているように、勝義解釈は円成実性によって示されるが、世俗についてもまた円成実性を含む三性によって示されることが次の世俗解釈により確認される^⑬。

さらに、粗大〔なる真実〕と微細なる真実が、〔順次〕世俗〔諦〕と勝義諦である。それは、根本真実（三性説）において、どのように知られるべきであるのか。

概念設定 (prajñapti)、認識 (pratipatti) の故に、同様に顯示 (udbhāvanā) の故に、粗大

【なる真実】（世俗諦）である。III k.10bc

実に概念設定としての世俗、認識としての世俗、[IV] 顕示としての世俗という三種が世俗である。これによって、世俗諦が根本真実（三性説）において順次〔遍計所執性、依他起性、円成実性であると〕知られるべきである。

MAVBhは、勝義は円成実性のみによって知られるのに対し、世俗は遍計所執性、依他起性、円成実性の三つによって知られると説く。円成実性によって知られる世俗とは[IV] 顕示としての世俗であり、この[IV] 顕示としての世俗についてMAVBhはそれ以上詳しい註釈をなさないが、安慧（Sthiramati, ca. 510-570）によるMAVBhの復註『中辺分別論釈疏（*Madhyāntavibhāga-ṭīkā* : MAVṬ）』はこの[IV] 顕示としての世俗を次のように註釈する^⑬。

同様に、真如等の言葉によって不可言説なる法界を表現すること、それが顕示である。それによって、法界の言語表現は顕示としての世俗である。そして、それ故に顕示としての世俗として円成実性は世俗諦である。このうち、概念設定と顕示との二つの世俗は機会を捉えて〔世俗諦に〕設定されたと知るべきであって、本質的に〔世俗諦なの〕ではない。

MAVṬは[IV] 顕示としての世俗とは「真如等の言葉によって不可言説なる法界を表現すること」、つまり真如等の言語表現であると説く。そして、言語表現されたものとして円成実性は世俗であると説くのである。ただし、円成実、[IV] 顕示としての世俗は「本質的に世俗諦なのではない」と本質的には勝義であることを暗示している点は注意しなければならない。後述するように、この[IV] 顕示としての世俗の内容はPPrにおける[4-1]「不生」等の教説と対応するものであり、PPrにおいては勝義に分類されることから、[IV] 顕示としての世俗をMAVṬは本質的には勝義として理解したと考えられる。

以上から、MAVBhは円成実性によって三種の勝義と三種の世俗のうちの一つを示すと考えられるが、勝義は三様の円成実性によって、世俗は一様の円成実性によって、つまり四様の円成実性によって二諦を示すのである。この円成実性が四様であること、三様の円成実性が三種の勝義解釈を示すことは四種清浄法との関連から導きだされる。四種清浄法とは『阿毘達磨大乘經（*Abhidharmamahāyāna-sūtra*）』^⑭に説かれる、一切の清浄法を自性清浄、無垢清浄、道清浄、所縁清浄の四種に分けて示すものである。四種清浄法の内容は『阿毘達磨大乘經』を引用するMAVṬによって次のように確認される^⑮。

実に以下のように『阿毘達磨大乘經』の二偈において説かれる。

生起について幻等が説かれた。遍計所執によって存在しないことが説かれた。一方、四種清淨によって円成実は説かれる。

〔四種〕清淨とは、自性〔清淨〕、無垢〔清淨〕、道〔清淨〕、所縁〔清淨〕である。何故ならば、清淨なる諸法は四種に包摂されるからである。

… 四種清淨に基づいて円成実を説く。四種清淨のうち、

[a] 自性清淨とは、雑染を伴っている時の真如等である。

[b] 無垢清淨とは、まさにそれら（真如等）が無垢なる時のものである。

[c] 空性等を体得する道清淨とは、菩提分等である。

[d] 道を生ぜしめるための所縁清淨とは、法界等流の経等である。それ（経等）に依拠して道が生じる故に。

MAVṬは四種清淨法とは雑染を伴った真如等、[a] 自性清淨、無垢なる真如等、[b] 無垢清淨、菩提分等、[c] 道清淨、法界等流の経等、[d] 所縁清淨であり、この四種清淨法によって円成実が示されると説く。この四種清淨法と勝義についての三種の複合語解釈、そして[IV] 顯示としての世俗との関係について、袴谷 [1976] は詳細な考察を行っている。^⑦

袴谷によると、[a] 自性清淨と [I] Tp 解釈による対象としての勝義は共に「真如 (tathatā)」といわれることから、両者の対応関係は推測される。^⑧ 次に、[b] 無垢清淨と [II] Kdh 解釈による体得 (prāpti) としての勝義はともに行爲の結果としての「涅槃」を意味し、MAVṬが [I] 体得としての勝義について「無垢真如 (nirmala-tathatā)」と註釈することからも両者の対応が確認される。そして、[c] 道清淨と [III] Bv 解釈による行爲 (pratipatti) としての勝義は両者がともに「道」を意味するので対応している。一方、[IV] 所縁清淨と対応するものはMAVBhにおける勝義のうちに見いだすことはできない。[d] 所縁清淨、法界等流の経等の教説は言語表現されたものであり、言語表現された教説はもはや「勝義」ではなく、「世俗」でしかない。しかも、教説は清淨法界等流のものとして「円成実性＝勝義」のうちに含まれるという矛盾的性格をもつと袴谷は言う。

袴谷が指摘する四種清淨法と三種の複合語解釈との対応関係は極めて妥当なものであろう。さらに、円成実性が示す世俗、[IV] 顯示としての世俗とは真如等を言語表現することであるので、これは言語表現されたものである教説、[d] 所縁清淨と対応していると考えられるのである。^⑨ このMAVṬの註釈をふまえるとMAVBhは四種清淨法に基づき円成実性を説き、円成実性によって勝義を示したということとなる。そして、袴谷の指摘する四種清淨法と勝義の関連をふまえると、円成実性もまた分類されていると理解できる。つまり、MAVBhは四種清

浄法に基づき円成実性を四様に分類し、三様の円成実性により、三種の勝義を、一様の円成実性により、三種のうちの一つの世俗を示すと考えられるのである。ここで注目すべきは、四種清浄法の内容から明らかな様に、この分類が菩薩道に裏付けられた階層的なものであるということである^④。勝義や円成実性にある種の階層性が見られるのは四種清浄法にそういった視点がもちこまれていたことに由来すると理解すべきであろう。

3. *Prajñāpradīpa* と *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* との勝義解釈の相違点

上述の様に、MAVBhにおける勝義解釈は、四種清浄法に基づき四様に区別された円成実性によって示されるが、この円成実性についての四様の区別は、MAVBhの勝義解釈の影響を受けるPPrの勝義解釈とも対応するものであろうか。ここで今一度PPrにおける勝義解釈を整理する。

- [1] 勝れた対象である真実。(Kdh 解釈)
- [2] 無分別智の対象である真実。(Tp 解釈)
- [3] 無分別智。(Bv 解釈)
- [4] [4-1] 「不生」等の教説、[4-2] 聞・思・修から生じる智慧。(複合語解釈なし)

四様の円成実性と四種の勝義解釈の関連は、[I]-[III] と [1]-[3] については斎藤等の諸研究によって指摘されている複合語解釈の関連から対応し、[4-1] 「不生」等の教説は言語表現された教説という点で、また、直接的ではないが、[4-2] 聞・思・修から生じる智慧は、勝義を理解するための「手段」という点で [IV] 顕示としての世俗たる円成実性と一定の対応関係が予想されよう。故に、MAVBhとPPrの勝義解釈との関連は三種の複合語解釈と三種の勝義解釈より、むしろ四様の円成実性と四種の勝義解釈とが対応していると考えられるべきであろう。

ただし、PPr-XXVにおいて痛烈に批判される円成実性そのものをPPrが肯定的に認めているとは考え難く、この対応関係には幾つかの相違が生じている。第一に四種清浄法の [a] と [b]、MAVBhにおける勝義解釈 [I] と [II]、PPrにおける勝義解釈 [1] と [2] の内容は全て真如、涅槃（無垢なる真如）、真実というものであり対応関係が認められるが、PPrは [1] と [2] についてMAVBh、MAVT、四種清浄法のような、真如と涅槃、有垢と無垢という区別をしていない。

次に、Bv 解釈による勝義についてMAVTが「行為としての勝義は道である。何故にか、それは勝れた義（勝義）を有するという意味で。義とは対象或は目的である。対象とは真如であ

り、目的とは涅槃である。」と註釈することから、MAVBhにおける [III] Bv 解釈による勝義には「涅槃を目的とする」という解釈と「真如を対象とする」という解釈の二つの解釈が含まれていると考えられ、真実を対象とするPPrの [3] 無分別智との対応関係が確認できるが、PPrの勝義解釈には涅槃を目的とする「道」の内容は確認できない。

最後に、PPrの勝義解釈 [4-1] 「不生」等の教説は言語表現されたものとして、法界等流の経等、[IV] 顕示としての世俗と対応するが、この内容はMAVBhにおいては世俗に配当されていたものであり、勝義に配当するPPrとは異なっている。さらに、PPrにおける [4-2] 聞・思・修から生じる智慧はMAVBhの勝義解釈にも四種清浄法にも見いだすことができないという相違もある。

PPrとMAVBhの勝義解釈については、その共通点に重点がおかれる一方で、相違点についてはあまり言及されてこなかったように思われる。しかし、両者には複数の相違点があり、PPrの勝義解釈の独自性を考察する上ではむしろこの相違点が重要な意味をもつこととなる。

第一の相違に関して、PPr-XXVは「法界は、煩惱や〔無顛倒なる〕知を伴って生じたのではないので、水等の如く、真如が雑染、清浄になることはない。」と説いていることから、PPrは自身の法界理解に基づいてMAVTの [I] と [II]、四種清浄法の [a] と [b] に見られるような、真如についての有垢、無垢という区別をなさないことが理解される。

また、MAVBhの真如と涅槃という区別の相違、第二の相違については、斎藤が「パーヴィヴェーカは、勝義を無分別智とその対象 (= 真実) という枠組みのなかに勝義を捉える」と指摘する点に集約されるであろう。PPrが勝義を「真実とそれを対象とする智慧」の枠組みで捉えるのに対し、MAVBhが「涅槃とそれを目的とする道」、「真如とそれを対象とする智慧」という二重の枠組みで勝義を捉えることは上述したMAVTの註釈からも明らかである。この両論の相違は、PPrの涅槃理解と密接に関連する。PPr-XXVは「涅槃を体得するために修道を實踐することがあるので、勝義として涅槃は存在する」と、涅槃の有を主張する対論者^⑤に対して次の如く反論する。

ここで〔対論者は、次のように〕言う。

「〔主張〕勝義として涅槃はまさに存在する。

〔理由〕生と老死を畏れる者達がそれ（涅槃）を体得するために〔修習に〕入ることがある故に。

〔異類例〕存在しないものについて、優れた人々がそれ（涅槃）を体得するために〔修習に〕入ることはない。例えば亀の毛の如く。

〔連合〕涅槃についてはそれを体得するために優れた人々が修道に入ることがある。

【帰結】それ故に勝義として涅槃は存在するのである。」

これに対して述べる。〔輪廻と涅槃とに〕区別があるならばあるものによって別のものを体得することが見られる。例えば手が足に達する如く。しかし、我々の主張では、勝義としては輪廻と涅槃における形象にはそのような〔区別〕はないので、涅槃を体得するために精進することもないのである。何故かという、すなわち、

輪廻には涅槃との区別は何ら存在しない。

涅槃には輪廻との区別は何ら存在しない。MMK-XXV k.19

認識されない点で等しいので、両者とも認識されない故に、という主旨である。それら（輪廻と涅槃における形象）が妄想された本体として認識されないかはすでに述べたのである。それ故に「それ（涅槃）を体得するために〔修習に〕入ることがある故に」というこの証因の意味は成立することではなく、意味も異なる。

PPrは「勝義として、輪廻と涅槃を区別しない故に、涅槃を体得するために実践することはない。それ故に勝義として涅槃が存在することはない」と説く。PPrにとって「涅槃とそれを目指すとする道」という枠組みは、対論者が主張する「勝義としての涅槃の有」を肯定するものであり、当然受け入れ難いものであった。故にこの枠組みで勝義を捉えることは、勝義としての「有」を肯定することとなり、PPrはこの枠組みを自身の勝義解釈に影響させなかったのである。そして、MAVBhに見られた「勝れた目的」というKdh解釈によって導きだされる「涅槃」という勝義解釈をPPrは継承することなく、Bv解釈によって導きだされる「道」という勝義解釈もまた継承せず、あくまでも「真実とそれを対象とする智慧」という枠組みによってのみ勝義を捉えるのである。

第三の相違については、MAVTが〔IV〕顕示としての世俗を「本質的に世俗諦なのではない」と説く様に「空」、「真実」、「真如」といったものを言語表現することの難解な立場をふまえると、PPrが〔4-1〕「不生」等の教説を勝義に位置づけることにそれほど問題はないかもしれないが、このPPrの意図は筆者には断言しかねる。大西〔1993〕は、PPrにおいて教説は不生、空等を説く「勝義の教説」とそれ以外の「世俗の教説」とに二分されているという主旨の指摘をしており、^②教説を二分するにあたって、〔4-1〕「不生」等の教説が勝義に位置づけられたと考えるべきであろうか。また四種清浄法、MAVBhの円成実性解釈にみられない〔4-2〕聞・思・修から生じる智慧については、PPrが「真実とそれを対象とする智慧」という枠組みによってのみ勝義を捉えるにあたって「智慧」を強調したとも考えられるが、PPrの勝義解釈に影響を及ぼしたと考えられるもう一つの論書、^③『阿毘達磨俱舍論（Abhidharmakośa-bhāṣya：AKBh）』の影響と考えるべきであろう。^④

このアビダルマ (abhidharma) と呼ばれるものは何であるのか。

アビダルマとは無垢なる智慧と、〔それに〕随伴するものとである。I k.2a

このうち、「智慧」とは法の分析である。「無垢」とは無漏である。「〔それに〕随伴するもの」とは、「〔それを〕とりまくもの」とである。この様に、無漏の五蘊がアビダルマであると説かれたことになる。以上は勝義的アビダルマである。一方、慣習的には

それを得るためのそれと、論書なるものとである。I k.2b

「それ」とは、聞・思・修よりなる有漏の智慧と、生得の〔智慧と、それに〕随伴する〔法〕とである。「論書なるもの」とは、そ〔の無漏〕の智慧を得るためのそれ（論書）も、それ（無漏の智慧）の資糧となるからアビダルマと呼ばれる。

AKBhはアビダルマを勝義的アビダルマと慣習的アビダルマに分類し、勝義的アビダルマを無垢なる智慧とそれに随伴するもの、慣習的アビダルマを聞・思・修よりなる有漏の智慧、生得の智慧とそれに随伴する法、そして論書であると説く。無垢なる智慧は〔3〕無分別智と、聞・思・修よりなる有漏の智慧は〔4-2〕聞・思・修から生じる智慧と、論書は〔4-1〕「不生」等の教説と対応するものであり、この対応関係からPPrの勝義解釈はMAVBhのみでなくこのAKBhのアビダルマ解釈の影響をも受けていると考えられる。つまり、MAVBhに見られなかった〔4-2〕聞・思・修から生じる智慧はこのAKBhの影響を受けてのものであると考えられる。

以上の考察から、PPrはMAVBhの円成実性、二諦を修道論として階層的に分類する解釈の影響を受けながらも、そこから「有」を肯定する要素を排除し、MAVBhの四様の円成実性を「真実とそれを対象とする智慧」という勝義の枠組のみに集約し、そこにAKBhのアビダルマについての解釈を導入して独自の勝義解釈を成立させたと考えられるのである。これ故にPPrでは、MAVBhのような真如と涅槃という区別がなされず、道ではなく無分別智であり、〔4-2〕聞・思・修から生じる智慧が付加されるのである。

そして、PPrにおける〔4〕はMAVBhにおける〔IV〕顕示としての世俗と対応するものであり、MAVBhにおける勝義の複合語解釈との対応が見られない以上、「複合語解釈なし」と理解すべきであろう。

おわりに

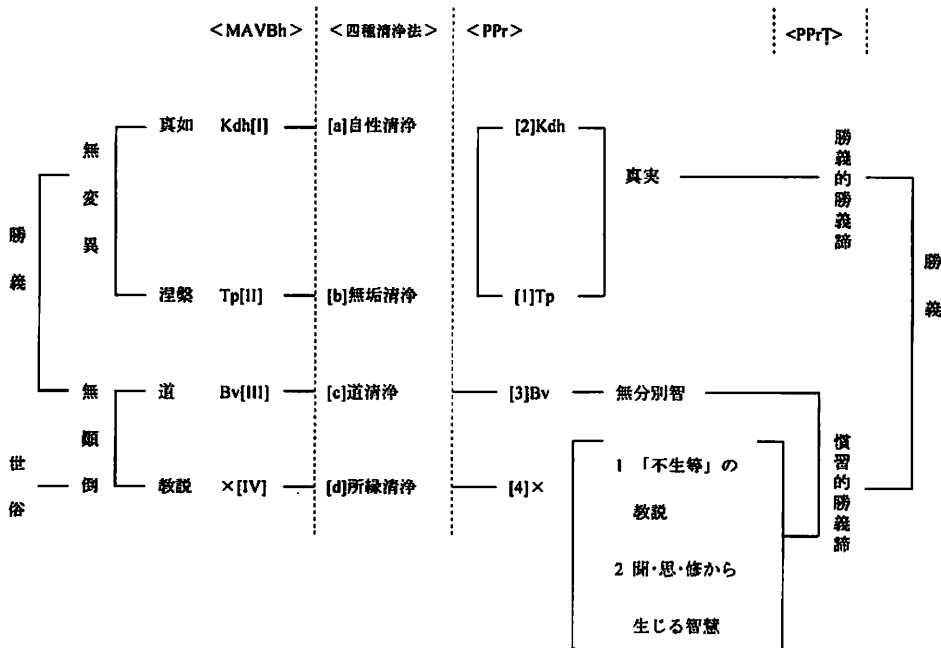
これまでPPrとMAVBhの勝義解釈の関連については、PPrの勝義解釈は三種であり、三種の勝義解釈に対して三種の複合語解釈が影響すると指摘されてきたが、以上示した様にその影響関係はMAVBhにおける二諦を示す際の、四種清浄法に基づく階層的な四様の円成実性がPPrの四種の勝義解釈へと影響したと考えられる。円成実性を階層的に四様に分類し、その円

成実性に基ついて二諦を解釈するというこの点こそがMAVBhからPPrへの主たる影響であり、勝義の複合語解釈はそれに伴う副次的影響であろう。

そして、PPrは勝義をMAVBhのように「涅槃とそれを目的とする道」、「真如とそれを対象とする智慧」という二重の枠組みに勝義を捉えるのではなく、瑜伽行唯識学派の特徴である「有」の要素を排除した「真実とそれを対象とする智慧」という枠組みのみによって勝義を捉えるのである。この点は、瑜伽行唯識学派の影響を受けながらも根本的な思想の相違から、そのまま影響を受けることを拒絶したPPrの立場を明確に示していると言えよう。おそらく、PPrは世俗と勝義を結ぶ思想をMAVBhの菩薩道に基づき分類される円成実性、そしてそれによって示される二諦理解に見いだそうとしながらも、根本的な思想の相違によって、全てを認めることができなかったのではなかろうか。

また、本稿ではふれることができなかったが、MAVBhにおける分類された勝義は瑜伽行唯識学派以前のMMKの註釈文献には見いだすことができない独自のものであり、瑜伽行唯識学派は二諦から自派特有の三性を発展させる一方で、二諦そのものも独自に発展させたと言える。二諦から三性、二諦から瑜伽行唯識学派独自の二諦という二つの発展の流れについては別稿にて考察したい。

PPrとMAVBhにおける勝義解釈と四種清浄法と関係図



略号

- AKBh : Vasubandhu. *Abhidharmakośa-bhāṣya*, ed. by Prahlād Pradhan, *Abhidharmakośabhāṣya* of Vasubandhu, 1967.
- MAVBh : Vasubandhu. *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, ed. by Gajin Nagao, *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, 鈴木学術財団, 1964.
- MAVṬ : Sthiramati. *Madhyāntavibhāga-ṭīkā*, ed. by Susumu Yamaguchi, *Madhyāntavibhāgaṭīkā*, 破塵閣, 1934. D 4032, P 5534.
- MMK : Nāgārjuna. *Mūlamadhyamaka-kālikā*, ed. by J. W. de Jong, *Mūlamadhyamakakālikā*, Adyar Library Series 109. 1977.
- PPr : Bhāviveka. *Prajñāpradīpa*. D 3853. P 5253.

参考文献

赤羽律

- [2002] 「『二諦分別論』に見られる『勝義』の表現について」『仏教文化』12.

池田道浩

- [2001] 「*Tarkajvālā*の二諦説に関する疑問 (1)」『曹洞宗研究員研究紀要』31.

江島恵教

- [1980] 「中観思想の展開—Bhāviveka研究—」春秋社.
- [1990] 「Bhāvaviveka / Bhavya / Bhāviveka」『印度学仏教学研究』38-2.

大西薫

- [1993] 「勝義の一考察—『中論頌』第24章第10偈のanāgamyāについて—」『哲学』45.

梶山雄一

- [1980] 「『知恵のとしび』第二十五章 (前段の試訳)」『密教学』16・17.

熊谷誠慈 (KUMAGAI Seiji)

- [2011] “Bhāviveka’s Theory of the Absolute Truth”『印度学仏教学研究』59-3.

斎藤明 (SAITO Akira)

- [1998] “Bhāviveka and the *Madhya (anta) vibhāga/-bhāṣya*”『印度学仏教学研究』46-2.
- [1999] 「パーヴィューエーカの勝義解釈とその思想史的背景」『論集』9.
- [2006] “Is Nāgārjuna a Mādhyamika?”『法華経と大乘経典の研究』山喜房佛書林.

高橋荘

- [1973] 「龍樹の二諦説」『宗教研究』215.

長尾雅人

- [1948] 「中観哲学の根本的立場 (承前)」『哲学研究』31-11. (長尾 [1978] に所収)
- [1978] 「中観と唯識」岩波書店.
- [1982] 「撰大乘論—和訳と注解—上」講談社.

那須真裕美

- [1999] 「中期中観派の二諦説—勝義へ志向させる方法論を中心に—」『仏教学研究』55.
- [1999] 「Bhāvivekaの二諦説について」『印度学仏教学研究』47-2.

袴谷憲昭

- [1976] 「唯識説における仏の世界—＜四種清淨法＞の構造—」『駒沢大学仏教学部研究紀要』34.

松本史朗

- [1978] 「Jñānagarbhaの二諦説」『仏教学』5.

宮本浩尊

[2010] 「バーヴィヴェカによる瑜伽行学説批判の思想的背景」『仏教学セミナー』91.

安間剛志

[2007] 「Tarkajvālāの二諦説」『印度学仏教学研究』56-1.

[2008] 「BhāvivekaとTarkajvālā」『日本西藏学会会報』54.

註

- ① Saito [2006] は、龍樹を大乘アビダルマ運動の創始者 (the originator of Mahāyāna-Abhidharma movement) として位置づけ、「中観学派」という名称は瑜伽行唯識学派に対抗する形で清弁が自らの学派名として名乗ったものであるとの見解を示している (pp. 158-159.)。筆者はこの斎藤の見解に賛同するが、本稿が扱う清弁との関連からここでは中観学派の始祖としておく。
- ② 「Bhāviveka」という名称については、江島 [1990] を参照。
- ③ 本論の末尾に、四種清浄法とPPr, MAVBhにおける勝義解釈の関係図を挙げている。こちらも参照していただきたい。
- ④ Cf. MMK, de Jong ed. p. 34.
dve satye samupāśritya buddhānām dharmadeśanā /
lokasaṃ vṛtisatyam ca satyam ca paramārthataḥ // MMK-XXIV k.8
- ⑤ PPr, D Tsha 228a3-6, P Tsha 286a7-b3.
- ⑥ Cf. MMK, de Jong ed. p. 25.
aparapratyayaṃ śāntaṃ prapañcāir aprapañcitam /
nirvikalpam anānāṛtham etat tattvasya lakṣaṇam // MMK-XVIII k.9
- ⑦ この「de」の指示内容は池田 [2001] (pp. 6-8, n. 5) で問題とされるが、本稿では安間 [2008] (pp. 60-61, n. 15) と同様に、当該箇所へ復註を付したAvalokitavrataの解釈に従った。
- ⑧ MAVBh, Nagao ed. p. 41.
- ⑨ 斎藤 [1999] pp. 72-79.同様の見解はSaito [1998] pp. 24-25、池田 [2001] p. 6, n. 5、安間 [2008] p. 15にも示される。
- ⑩ 池田が述べている①-④は筆者の [1]-[4] と同様のものである。
- ⑪ Cf. n. 9.
- ⑫ ただし、Kumagai [2011] は筆者の分類 [1]、[2] を対象たる勝義 (absolute truth as object) として同一視するため勝義解釈は三種であるとする。
- ⑬ MAVBh, Nagao ed. p. 41.
audārikasūkṣmatattvaṃ punaḥsaṃvṛtiparamārthasatyam, tan mūlatattve kathaṃ veditavyam /
prajñaptipratipattitas tathodbhāvanayodāraṃ / MAV-III k.10bc
trividhā hi saṃvṛtiḥ prajñaptisaṃvṛtiḥ / pratipattisaṃvṛtiḥ / udbhāvanāsaṃvṛtiś ca / tayā saṃvṛtisatyatvaṃ mūlatattve yathākramaṃ veditavyam /
- ⑭ MAVṬ, Yamaguchi ed. p. 124.
tathatādīśabhair nirabhilāpyasya dharmadhātor yā saṃsūcanā sodbhāvanā / tayā dharmadhātor vyavahāra udbhāvanāsaṃvṛtiḥ / ataś codbhāvanāsaṃ vṛtyā pariniṣpannaḥ saṃvṛtisatyam / tatra prajñaptiyudbhāvanāsaṃvṛtītvam avasaraṣaṃ grahavyavasthānaṃ veditavyam na tu svabhāvata iti /

*斜体字は校訂者による還元梵文。

- ⑮ 『阿毘達磨大乘經』は本稿が紹介するMAVṬの他、『撰大乘論』、『唯識三十論』、『阿毘達磨集論』など複数の瑜伽行唯識学派の論書に教証として引用される他PPrもまた引用する。しかし、Skt原本が現存しないのみならず、Tib訳、漢訳などいずれの原語にも翻訳された形跡はなく、その全貌は知られない。(Cf. 長尾 [1982] pp. 28-33.)

- ⑯ MAVṬ, Yamaguchi ed. p. 112, D Bi 243a7-243b7, P Tshi 83b6-84a8.

evaṃ hy uktam abhidharmasūtragāthādvaye
māyādideśanā bhūte kalpitān nāstideśanā /
caturvidhaviśuddhes tu pariniṣ pannadeśanā //
śuddhiḥ prakṛtivaimalyaṃ ālambanaṃ ca mārgatā /
viśuddhānāṃ hi dharmānāṃ caturvidhagṛhitatvam //

[...rnam par dag pa rnam pa bzhi la ltos nas yongs su grub par bstan to // rnam par dag pa rnam pa bzhi la

[a] rang bzhin gyis rnam par dag pa ni dri ma dang bcas pa'i dus kyi de bzhin nyid la sogs pa'o //

[b] dri ma med pas rnam par dag pa ni de dag nyid dri ma med pa'i dus na'o //

[c] stong pa nyid la sogs pa 'thob pa'i lam rnam par dag pa ni byang chub kyi phyogs la sogs pa'o //

[d] lam skyed pa'i phyir dmigs pa rnam par dag pa ni chos kyi dbyings kyi rgyu mthun pa bstan pa'i chos mdo'i sde la sogs pa ste / de la brten nas lam skye ba'i phyir ro //

*斜体字は校訂者による還元梵文。[] 内は現存するSkt写本には見られない。

- ⑰ 袴谷 [1976] pp. 26-28.

- ⑱ 袴谷はこの両者の関係について、同じ『阿毘達磨大乘經』の四種清浄法の偈頌を引用する『撰大乘論』に対する世親、無性の註釈にふれ、如来蔵との関連に言及している。

「<本性清浄>と対象 (artha) としての<円成実>とが対応することはかならずしも明確ではない。両者がともに<真如> (tathatā) であるといわれている点より、両者の関係はある程度推測できるが、その内容の記述よりみると前者の方がより豊かに見えるからである。特に、前者に対するVasubandhu, Asvabhāva註において、それが<如来蔵> (tathāgata-garbha) と解されている点に、その原因があると思われる。しかし、これは外見上の相違であって、人の自覚するとせぬとにかかわらず、あるがままの世界 (<真如>) の遍満していることが<如来蔵>であり、それは聖者のみ知る世界 (paramasya jñānasyārthaḥ = tatpurṣa) であるという点で両者は同質のものである。<本性清浄>に対するAsvabhāva註は、<真如>などの同義語をそれぞれ解釈しているが、<勝義>を、彼も恐らくは知っていたにたいがいがない三義中のtatpurṣaのみによって解釈したのはこの点を意識したためかと思われる。」(p. 28)

- ⑲ MAVṬ, Yamaguchi ed. p. 125.

prāptiparamārtho nirvāṇaṃ ekāntanirmalatathatāśrayoparāvṛttīlakṣaṇam /

*斜体字は校訂者による還元梵文。

- ⑳ 袴谷 [1976] pp. 29-32.

- ㉑ 四種清浄法の二偈とは別の『阿毘達磨大乘經』の偈頌がPPrには引用される。(PPr, D Tsha 243a7, P Tsha 305a3-4.)

- ㉒ MAVṬ, Yamaguchi ed. p. 126.

pratipattiparamārtho mārgaḥ / kiṃ kāraṇaṃ paramo 'syārth itī kṛtvā / viśayaḥ prayo-

janam vārthaḥ / viśayas tathatā prayojanam nirvāṇam /

- ② PPr, D Tsha 244a6-7, P Tsha 306a7-8.

chos kyi khams ni / nyon mongs pa rnam dang / shes pa dang lhan cig skye ba ma yin pas
chu la sogs pa bzhin du / de bzhin nyid kun nas nyon mongs pa dang rnam par byang ba
dag tu 'gyur bar mi rigs so //

- ④ Cf. 斎藤 [1999] p. 78.

- ⑤ 梶山 [1980] (p. 66, n. 23) は、この対論者が瑜伽行唯識学派であると指摘する。これに対して宮本 [2010] (pp. 97-98) は、対論者を瑜伽行唯識学派とする根拠は見いだせず、瑜伽師 (*yogin) として理解するのが妥当であろうと指摘している。筆者は宮本が指摘する通り瑜伽行唯識学派と限定することはできないと考えるが、「瑜伽師」という名称、MAVBhが勝義解釈において涅槃を道の目的として理解している点から、ここでは瑜伽師を瑜伽行唯識学派のみを指すと限定することはできないが、瑜伽行唯識学派を含む瑜伽師と理解できると考えている。

- ⑥ PPr, D Tsha 238a4-238b1, P Tsha 298b2-299a1. MMK, de Jong ed. p. 39.

'dir smras pa /

don dam par mya ngan las 'das pa ni yod pa kho na yin te /

skye ba dang rga shis 'jigs pa rnam de thob par bya ba'i phyir 'jug pa yod pa'i phyir
ro //

med pa la khyad par can rnam de thob par bya ba'i phyir 'jug pa ma mthong ste / dper na
rus sbal gyi sbu bzhin no //

mya ngan las 'das pa la ni de thob par bya ba'i phyir de khyad par can rnam lam bsgom
pa la 'jug pa yod pas

de'i phyir / don dam par mya ngan las 'das pa ni yod pa kho na yin no //

'dir bshad pa / khyad par yod na ni gzhan gyis gzhan 'thob pa mthong ste / dper na lag
pas rkang pa slebs pa lta bu yin na / kho bo cag gi phyogs la don dam par 'khor ba dang /
mya ngan las 'das pa dag la rnam pa de lta bu med pas mya ngan las 'das pa thob par bya
ba'i phyir 'jug pa med do // ci'i phyir zhe na / 'di ltar /

'khor ba mya ngan 'das pa las // khyad par cung zad yod ma yin //

mya ngan 'das pa 'khor ba las // khyad par cung zad yod ma yin // MMK-XXV k.19

(na saṃsārasya nirvāṇāt kiṃcid asti viśeṣaṇam /

na nirvāṇasya saṃsārāt kiṃcid asti viśeṣaṇam //)

dmigs su med par mnyam pa nyid kyis gnyi ga yang dmigs su med pa'i phyir ro zhes bya
bar dgongs so // ji ltar de dag brtags pa'i bdag nyid du dmigs su med pa de ltar ni bstan
zin pas de'i phyir de thob par bya ba'i phyir 'jug pa yod pa'i phyir ro zhes bya ba'i gtan
tshigs de'i don ma grub pa nyid dang don 'gal ba nyid do //

- ⑦ 大西 [1993] pp. 99-100.

「この『勝義の教説』はBvにとっては全ての教説を意味しない。彼は第24章第8偈の註釈で、世俗を言語的慣用とし、それを經典のなかの『色などの諸物が生じる』などというアピグルマ的な真理を示す言葉や、『デーヴァグッタが行く』などという世間の人々の日常的な真理を示す言葉であるとする一方で、不生等の教説を聞・思・修の三慧とともに勝義であるとするからである。したがって、Bvは教説を、不生、空などを説く『勝義の教説』と、それ以外の『世俗の教説』に二分したことになる。」

- ⑧ Cf. 高橋 [1973] pp. 78-79, 松本 [1978] pp. 116-117, 池田 [2001] p. 9, n. 5.

㊟ AKBh, Pradhan ed. p. 2.

ko 'yam abhidharmo nāma /

prajñā 'malā sānucarā 'bhidharmaḥ AKBh-I k.2a

tatra prajñā dharmapracayaḥ / amaleti anāsravā / sānucareti saparivārā / evam
anāsravaḥ pañcaskandhako 'bhidharma ity uktaḥ bhavati / eṣa tāvat pāramārthiko 'bhid-
harmaḥ / sāmketikas tu

tatprāptaye yāpi ca yac ca śāstram / I k.2b

yāpi ca śrutacintābhāvanāmayī sāsraṇā prajñopapattipratilambhikā ca sānucarā / yac ca
śāstram asyāḥ prāptiyartham anāsravāyāḥ prajñāyāḥ tad api tatsaṃbhārabhāvād abhidhar-
ma ity ucyate /